

禪宗の教學發達に就て (一)

伊 藤 古 鑑

(一)

我が禪宗の立教開宗せられたのは支那である。支那に於て宗祖達磨大師が始めて禪宗なるものを傳へられたと云ふけれども、しかし果して達磨大師が禪宗を開かれたものであらうか、更に達磨大師已前に溯つて以てその源泉の如何を研究する必要はないであらうか。我が禪宗の付法血脈譜より云へば、達磨大師は印度に於ける般若多羅尊者の大法を繼承し、その單傳直指の宗旨を以て直ちに支那に傳へられた如くに説いて、そこに何等支那思想の影響を受けて居らなかつたものゝやうに思はれるが、今これを史的立場から觀察して、今日行はれて居る禪宗の教學發達に就て、その源泉を支那佛教の教學と相關聯するものなきか。若しありとせば如何なる關係に置かるべきものか。これに就ての討尋を此處に試みやうとしたのである。

(二)

先づ支那の佛教を研究するのに、最初は印度より支那へ佛教が渡來したのであるから、印度の經

典を支那へ翻譯すると云ふことが第一の事業であつた。その次ぎにはその翻譯した經典を攻究してその内容の如何を知ると云ふことが第二の事業であるから、それを講説し、續いてその註譯書を出だし、更にその註譯書の是非を討究し、經典の深理を研鑽すると云ふやうに進んで行つたものであらう。次ぎにその經典の理論のみを徒らに研究すると云ふことだけでは満足されず、既に印度に於ても實修方面が第一に行はれて居たのであるから、そこにその經典の趣旨に依り、それを實際に自己が體驗すると云ふ方面の考察が始まり、或は印度より實修的方法が傳はり、終には超凡越格の開祖が、その地に出現して、立教開宗の基礎を築き上げ、寧ろ理論を離れて實修へ、經典よりも經典已外に或る何物かを體驗せやうとする努力が最後の發達となり、歸結となつたものではなからうかと思はれる。故に我が禪宗に於ても、最初は坐禪に關する經典の翻譯が第一であり、第二にはそのの講究、第三には坐禪を實修することが行はれ、第四には印度の坐禪法が傳はり、第五には正しく支那に於ける禪宗の成立と云ふ順序を辿つて居たものと思はなければならぬ。而して此の五大順序の區劃を判然と定めることは出來ないにしても、少なくとも此の順序に依つて觀察した方が適當な方法ではなからうかと信ずるので、今もこの敘述を試みるのに大體に於て左の時代々々の教學發達を討尋して見たいと思つたのである。

一、禪經翻譯時代 後漢の桓帝建和二年(皇紀八〇八)安息國の沙門安世高來朝して、禪數の經典を

翻譯し、これと前後して月支國の沙門支婁迦讖來朝して、禪經及び般若楞嚴等の經典を翻譯せしに始まる。

二、禪經講讀時代 吳の赤烏十年（皇紀九〇七）康居國の沙門康僧會、初めて建業に來りて精舎を建て、『安般經註解』を著はして禪數を解釋し、これより稍々遅れて支那沙門の始めなる朱士行、洛陽に於て『道行般若』を講ぜしに始まる。

三、禪經實修時代 始めは禪數實修の傾向ありしが、終に龜茲國の沙門鳩摩羅什、姚秦の弘始三年（皇紀一〇六一）に長安に着してより譯經に着手し、大に般若系の經論を始め禪經を翻譯し講經し禪觀を勸む。またこれより少しく遅れて迦維羅衛の沙門佛馱跋陀羅、東晋の義熙二年（皇紀一〇六六）に長安に入り、更に南方廬山に赴いて禪經を翻譯し講經し、大に禪觀を勧められたので、これ等の門下は皆、禪旨を説き坐禪を實修せしに始まる。

四、禪觀傳來時代 始めは翻譯講經の傍ら、禪觀を傳へし印度僧多かりしも、北魏の孝文帝（在位二十八年自皇紀一一三二至皇紀一一五九）の頃、西域の佛陀禪師來朝するに及んで、禪觀を傳へ専ら坐禪を勸む。それより遅れて梁の武帝普通年中（自皇紀一一八〇至皇紀一二一八）南天竺の達磨大師來朝して、翻譯せず講經せず、また坐禪を勧めず、眞に大法の爲めに喪身失命を避けざる底の大機の爲めにのみ直指單傳の宗旨を傳へたるに始まる。

五、禪宗成立時代 達磨大師別傳の宗旨を良く護持して第六代に至り、惠能大師(自皇紀一二九八)の至皇紀一三七三の時代に及んで、専ら直指人心、見性成佛の眞意を發揚し、支那上下の人心に深く食ひ込んで、日常の行持に徹底せしめたと云ふに始まる。

已上の五大時期を區劃して、その時代の形勢を討尋して見たいと思ふのであるが、素よりこれは大體の觀察であつて、翻譯の如きは翻譯時代に限つたものではない。第二期にも第三期等にも通ずるので、寧ろ翻譯が隆盛になつたと云はなければならぬのであるけれども、今は禪宗教學の發達を觀察するのに、先づ始めの一百年間は翻譯が専ら行はれたものと見、次ぎの一百五十年間は翻譯したばかりでなく、更に講究し經序を添へ末註まで書かれるやうになつたものと見、次ぎの大約一百年間は翻譯し講經するばかりでなく、寧ろ禪經所詮の深理を我が身に體驗せんとして傍ら實修した時代と見、次ぎの大約二百年間は印度より禪僧渡來して禪觀を傳へ、それを専ら實修した時代と見たのである。而して我が禪宗第六祖と仰ぐ惠能大師時代より漸く支那思想の有らゆる特長を加味し支那上下に禪宗と云ふ宗旨が傳播した時代と見たのである。

(三)

先づ始めに禪經翻譯時代から觀察して見やう。支那へ佛教の渡來したのは、後漢の明帝永平十年(皇紀七二七年)と云はれて居るが、しかしこれに就ては確實なる史料がある譯ではない。或はそれ已

前に佛教が来て居たものか、或はそれ已後に佛教が渡來したものか判然したことは、今のところ云へないのである。唯だ後代の歴史家が傳説として、後漢の明帝永平十年に迦葉摩騰、竺法蘭の二人の高僧が、洛陽の都に到着したと云ふに過ぎぬのである。故に事實上に於て信用の出来る時代は、先づ迦葉摩騰等より遅るゝこと大約八十年後に於ける後漢の安世高、支婁迦讖の時代からであらうと思はれる。即ち安世高、支婁迦讖は共に支那翻譯家の最初の人であつて、その翻譯の經典も現存し、その傳記も比較的明瞭であるから、この二人を以て支那佛教史の發端をなすものと見るのである。而してこれ等二人に於ても既に坐禪に關する經典が譯出せられて居たのであるから、禪宗の教學發達も亦支那佛教史と其の發端を共にするものと思はなければならぬ。

支那に於ける翻譯を研究するのに、その翻譯經典の目錄と云ふものが比較的遅い時代に編成せられて居るので、安世高などの翻譯に就ても何れまでが眞實であるか判然せない。支那に於て始めて翻譯經典の目錄が編成されたのは何れの時代か不明である。史實の示すところでは『古經錄』『舊經錄』『漢時佛經目錄』『朱士行漢錄』等(註二)があつたと云ふけれども、現存せないもので如何なるものか詳悉することは出来ない。現今に於て明瞭に云はるべきものは晋の道安の『綜理衆經目錄』一卷が始めである。道安の傳記は慧皎の『高僧傳』第五に委しく出て居るが、彼れに依つて見ると、

自漢魏迄晋、經來稍多、而傳經之人名字弗說、後人追尋莫測年代、安乃總集名目表其時人

詮『品新舊』、撰爲『經錄』、衆經有據、實由其巧。〔大正藏經』第五十卷三五二丁〕

と云ふて居る。而して道安の編成した『綜理衆經目錄』も散佚して現存せないものであるが、しかし其の補修とも見らるべきものが『出三藏記集』に掲げられて、その原型の大體を窺知することが出来る。この道安の經錄已後には翻譯の經典目錄も次第に編成せられたのであるから、翻譯の經名も人名も確實に證することが出来るやうになつた譯である。(註二)

『安世高の翻譯經典に關しては、僧祐の『出三藏記集』第二に「右三十四部、凡四十卷。漢桓帝時、安息國沙門安世高所譯出」〔大正藏經』第五十五卷六丁〕と云ふて、その翻譯經典の名目を列ねて居るが、その中、坐禪に關する經典としては、

一、『安般守意經』一卷 安錄云ふ
安般經

二、『陰持入經』一卷

三、『大十二門經』一卷

四、『小十二門經』一卷

五、『大道地經』二卷 安公云大道地經者修
行經抄也外國所抄

六、『大安般經』一卷

七、『思惟經』一卷 或云思惟
略要法

八、『禪行法想經』一卷

の八部九卷を擧げて居る。しかし第六の『大安般經』は『小安般兼註解』と云ふて、現藏本では第一の『安般守意經』に當つて居るので、別の禪經ではないから、實際に於ては七部八卷の禪經を翻譯したものと云はなければならぬ。然るに安世高の翻譯經典には種々なる異説があつて、費長房の『歷代三寶記』第四には一百七十六部一百九十七卷を列ね、道宣の『大唐内典錄』第一、靖邁の『古今譯經圖記』第一も同じく費長房の説を受け繼いで居るが、しかし費長房の説は眞偽の差別を見ずして、唯だ徒らに多くの經名を列ねたと云ふのみで到底信ずることは出来ない。故に智昇は『開元釋教錄』第一に於て大に刪正し、九十五部一百十五卷に減じて居るけれども、これとても全部を信ずる譯には行かぬ。その中に於て禪經に關係あるものを擧げると全部で十三部二十一卷ある。前の『出三藏記集』第二の七部八卷の外に

一、『禪行三十七經』一卷或加品字
見寶唱錄

二、『五門禪要用法經』一卷初出見
長房錄

三、『禪經』二卷第二出房
云見別錄

四、『禪定方便次第法經』一卷見長
房錄

五、『禪法經』一卷見長
房錄

禪宗の教學發達に就て(一)

(七)

六、『修行道地經』七卷或六卷初出或云順道行經漢永康元年譯支般度製序見寶唱錄及別錄

を加へて居るやうに思ふ。(註三) かくの如く安世高には十三部二十一卷の禪經があると傳へて居るが、その中、現存するものは『安般守意經』『陰持入經』『道地經』『禪行法想經』『禪行三十七品經』の五部のみであつて、これ等は悉く『大正藏經』第十五卷に收められて居る。

(四)

次に安世高の禪經に就て思想の大體を窺つて見るならば、彼れは小乘學者であつて小乘禪に屬すべき人と云はねばならぬ。『高僧傳』に於ても、

博曉經藏、尤精阿毗曇學、諷持禪經、備盡其妙。(『大正藏經』第五十卷三二三丁)
と云ひ、また道安の『安般法序』にも

博聞稽古、特專阿毗曇、學其所出經、禪數最悉。(『大正藏經』第五十五卷四三丁)

と云ひ、その翻譯の經典より考へて小乘阿毗曇學者なることを知り、その禪經も悉く小乘禪に屬し禪數を良くした人と云ふことが出来る。而して其の思想内容を翻譯の禪經に就て考へて見ると、先づ『禪行法想經』と『禪行三十七品經』とは極めて小經であつて内容を検討するまでもない。『陰持入經』は二卷であるけれども、始めは一卷であつたものを後に開いたまでで、これまた一小經に過ぎぬ。その内容は五陰假和合の人身の深病たる非常、苦、空、非身なることを種々なる方面より説い

て、それを匡救する法門を種々に雜説したものである。即ち道安の『陰持入經序』が『出三藏記集』第六に載せてある。それに依つて見ると、

陰入之弊人莫知苦、是故先聖照以止觀、陰結日損成泥洹品、自非知機、其孰能與於此乎、
從首至于九絕、都是四十五藥也云々（『大正藏經』第五十五卷四丁）

と云ふて居る。しかし安世高所譯の禪經に於て特に主要なるものと云はるべきものは残りの二經即ち『安般守意經』と『道地經』とであつて、これに依つて委しく其の思想内容を考察して見やう。先づ『安般守意經』に就て『小安般經』と『大安般經』とあるかの如く云ふて居るが、これは安世高所譯の本文のみを『小安般經』と云ひ、これに對して康僧會が註したものを加へて『小安般兼註解』と稱するものを『大安般經』と云ふたものであらう。而して此の經も始めは一卷であつたものを後ちには二卷に開いたもので、『大正藏經』にも『大安般守意經』二卷となつて收められて居るが、しかし現今では康僧會の『註解』と混同して、何れまでが安世高の譯經の本文であるか不明である。而して其の混同したのは餘程久しいもので、經錄に依つて見ても『小安般兼註解』を直ちに『大安般守意經』と云ひ、現今の經となつて居るやうに思ふ。現今の經の卷末に、

此經按經首序、及見經文、似是書者之錯、經註不分而連者也、義賞節而註之、然往往多有不可分處、故不敢擅節、以遺後賢焉。（『大正藏經』第十五卷一七三丁）

と云ふてあるのを見ても、經と註とが混同して居るのを知ることが出来る。經題の安般守意とは如何なる意味であるかと云ふに、經文には種々なる方面から分別して説明せられて居るが、要するに念安般とか安般念とか云へる意味と同じで、安般を具さに云へば安那般那と云ひ、阿那般那、阿那波那とも書き、或は阿那阿波那とも書いて居る。譯して入息出息と云ふべきで、經文にも、

何等爲安、何等爲般、安名爲入息、般名爲出息。(『大正藏經』第十五卷一六五丁)

と云ふて居る。即ち行者が入息出息を數へて一より十に至り、反復數息して散亂の心を調停し禪定に入ることを云ふのであつて、五停心觀の中の數息觀に當つて居る。而してこの數息觀は小乘教に於ける十念の一に數へられ、この十念は決して甲乙なく、念佛、念法、念僧、念戒、念施、念天、念休息、念安般、念身非常、念死の十念勝劣なく、共に行者の意樂に任せて、その一を所入の門として久々に修習せば、必ず涅槃の聖果に到るものと説いて居る。(註四)けれども其の中、特に第八の數息觀と第九の不淨觀とに重きを置き、これを以て二甘露門と推獎するやうになつた。即ち『雜阿毗曇心論』一、序品に、

入佛法中爲甘露門、謂不淨觀及安般念、彼不淨觀者觀造色、安般念者觀四大。(『大正藏經』第二十八卷八七一丁)と云ひ、また『俱舍論』第二十二にも、

論曰、正入修門要者有二、一不淨觀、二持息念、誰於何門能正入修、如次應知、貪尋增者、

謂貪猛盛數現在前、如是有情名貪行者、彼觀不淨、能正入修、尋多亂心名尋行者、彼依息念能正入修。〔大正藏經第二十九卷一七七〕

と云ふて居るが、惟ふに安般守意は釋尊出世已前より外道の實修した入定の好方便であり、不淨觀は小乗教の厭世思想を最も良く詮表した觀法であるから、特に此の二甘露門を依用したものであらう。而して此の安般守意にも素より外道と佛教との相違あり、佛教に於ても小乗と大乘との用心に大に相違あるやうに思ふ。詳悉せんと要するものは、『增一阿含經』第一及第二十九、『大毗婆沙論』第二十六、『俱舍論』第二十二、『禪波羅密次第』第五、『摩訶止觀』第八等に依つて知るべきであるが今は『安般守意經』に依つて大體を窺つて見ると、その内容は極めて繁雜であつて義門紛亂、却つて思想の矛盾も往々にしてあり、未だ纏つたものとは云へぬが、要は小乗の數息觀と不淨觀とに依つて、次第に淺より深に禪定三昧に到ることを説いて居る。即ち康僧會の序文に示して居る如く、

(註五) 息を數へて一より十に至り、十數誤らず、小定三日、大定七日、寂として他念なく、怕然死するが如くにして初神に入り、更に垢濁を消滅して、心稍々清淨なるを二禪となし、尙ほ行寂止意これを鼻頭に懸くるを第三禪となし、終に頭より足に至つて、反覆微察して第四禪に到ることを明して居る。而して常に小乘禪に説く六妙門、十六持勝の説も出て居る。また三十七科の道品も擧げて居るが、しかし後世に翻譯せられた禪經の如く内容は整然としては居らないけれども、兔に角、

數息觀の大意は窺ふことが出来る。要するに呼吸は緩ならず急ならず、その中を得るやう調適して一より十を數へしむ、十息を數へて其の精神の亂れざるを淨息と云ひ、この淨息を以て初禪乃至第四禪に、漸次に禪觀を進めて、數息、相隨、止觀、還淨と、終には涅槃の聖果に到ると説いたものである。

(五)

次に『道地經』に就て云へば、その撰號に於て「天竺須賴拏國三藏僧伽羅刹、漢言衆護造、後漢安息國三藏安世高譯」(『大正藏經』第十五卷二三〇丁)と云ふて居る。即ち天竺の僧伽羅刹、譯して衆護三藏と云ふのが編纂したもの、やうに思はれる。而して此の僧伽羅刹と云ふのは僧伽羅叉とも云ふて、他に『僧伽羅刹所集經』三卷をも撰述して居る。『僧伽羅刹所集經』に加へられて居る道安の『僧伽羅刹經序』(註六)に依つて見ると、

僧伽羅刹者、須刺國人也、佛去世後七百年生此國、出家學道遊教諸邦、至毘陀越土、甄陀屬賓王師焉、高明絕世多所述作、此土修行經大道地經、其所集也云々(『大正藏經』第五十五卷七一丁)

と云ふて居る。尙ほ委しき考證は『國譯一切經』本緣部第九に『僧伽羅刹所集經』の國譯を擧げ、常盤博士が解題に試みられて居るが、要するに僧伽羅刹は佛滅後七百年頃の出世であつて、かの大乗佛教の創唱者と云はれて居る馬鳴菩薩と同じく、大月氏國王迦膩色迦の外護を受け、大に教線を張つ

た人であらう。而して其の思想内容は未だ小乗より大乘へ移らんとする時代であるから『修行道地經』と云ひ『僧伽羅刹所集經』と云ひ、共に大乘的色彩には乏しいものと思はなければならぬ。(註七)

この『道地經』には西晋の竺法護が翻譯した『修行道地經』七卷がある。その内容は三十品あるが、前の六卷二十七品は小乗禪、第七卷三品は大乘禪に屬する禪經と見らるゝので、その思想内容が突如として相違して居るから、第七卷三品は竺法護の翻譯にあらずして、後に加増したものと云はなければならぬ。(註八) 而して安世高所譯の『道地經』の内容は七品あつて、竺法護所譯の七卷本に對比すると、第一卷の初五品と、第二十二品と、第二十四品との七品に相當するので、素より其の思想内容は小乗禪に屬すべきものである。また安世高には七卷の『修行道地經』あるかの如く『開元釋教錄』には列ねて居るけれども、これは疑ふべき餘地が多い。尙ほ此の『道地經』に就て云ふべきことは多々あるが、今は略し、唯だ安世高所譯の一卷本のみ就て其の思想内容を窺つて見ると、現世の迷界なる相狀を説いて、無常、苦、無我、不淨なることを示し、五陰假和合であるから、自我として認むべき確實性がなく、五十五事の一々が皆空無常にして厭離すべきものであると示し、此處に修道の必要、解脱の欲求として禪定を説き、これを止と觀との二方面より説いて、眞に解脱へ趣く禪定としては數息觀と不淨觀とであるが、特に此の經に於ては不淨觀を力説し、漸次に進修して初禪乃至四禪に至り、種々なる神變不思議の自在神力を獲得することが出來ると説明したもので

ある。

已上に於て安世高所譯の注意すべき二經に就て大體を説明し來つたのであるが、今更に其の思想内容を概論するならば、『安般守意經』は數息觀を力説し、『道地經』は不淨觀を高唱して居るのであるが、その源は小乗の十念とか五停心觀から出て居るので、その中、特に重要な二甘露門を抽出して禪觀の骨子としたものであらう。而して十念の名目は前既に述べたのであるが、五停心觀の名目は不淨觀、慈悲觀、數息觀、因緣觀、念佛觀の五種であつて、(註九) 次ぎの如く多貪、多瞋、多散、愚癡、著我の病弊を對治するものであるが、しかし此の五種の觀法は十念と同じく、必ずしも全部を修する必要なく、心病に應じて其の一門に入り、而かも觀法の良ろしきを得ば、その一門を以て最極究竟の解脱位に到達することが出来るのである。故に今の安世高所譯の二經に於ても、一は數息觀を力説し、一は不淨觀を高唱して、坐禪觀法の初入を示したものではなからうかと思ふ。而して此の數息觀、不淨觀は素より小乗禪に屬するものではあるが、しかし其の説明の如何に依つては大乗禪ともなり得るのである。即ち最極究竟の解脱位には小乗大乘の差別はあるけれども、それに到達する爲めの手段として、數息觀とか不淨觀とか云へる形式を取るもので、その形式には本來大乘も小乗もない。唯だ其の差別を立つるのは其の内容に關してである。内容の法門が大乘的であれば大乘禪となり、小乗的であれば小乗禪と云ふのみである。故に今この安世高所譯の二經に内容

の法門が共に小乘的であるから小乘禪であつて、所入の形式たる數息觀も不淨觀も共に小乘的に見なければならぬ。

(六)

支那翻譯家の最初の人として安世高の譯經を述べ、その思想の大體を窺つて見たのであるが、この安世高は後漢の桓帝建和二年（皇紀八〇八）に安息國より錫を振つて洛陽に來たと云ふのである。これを殆んど同時代に月支國より支婁迦讖が洛陽に來たのである。その入洛の年代を安世高より已前とする説と已後とする説との二者あるも、殆んど同時代にして、多くを隔てゝ居るものではない。而して支婁迦讖の翻譯經典に就て云へば、『出三藏記集』第二には十三部二十七卷、『開元釋教錄』には二十三部六十七卷となつて居るが、その中に於て坐禪に關する經典は『般舟三昧經』一卷を『出三藏記集』に載せ、更に『禪經』一卷を『開元釋教錄』に加へて居る。而して『禪經』は散佚して見ることが出来ないが、『般舟三昧經』に至つては一卷本と三卷本とを共に『大正藏經』第十三卷に收めて居る。『出三藏記集』には一卷本のみを挙げ、『開元釋教錄』には二者共に舉げて居るが、その中の一卷本は關本部に入れて居るから、或は現藏本の一巻本は支婁迦讖の翻譯ではないかも知れぬ。しかし其の内容は三卷本の十六品の中に於て、第一第二第三第四第六第八第十三第十五の八品を列譯して一卷本としたのであるから、別の内容ではない。經題の般舟三昧とは如何なる意味であるかと云ふに、

般舟とは佛立と譯すべきで、この般舟三昧を行ずるときには三千十方の諸佛が現前すると申して居る。『大集賢護經』には恩惟諸佛現前三昧とも云ひ、或は常行道とも云ひ、天台の四種三昧の中の常行三昧と云ふのもこれから出て居る。委しいことは『摩訶止觀』第二に説かれて居るが、その源は矢張り小乗の五停心觀から出て居るものと思ふ。即ち五停心觀の中の念佛觀を大乘的に高調して、終には念佛三昧に進んで行つたもので、禪觀と云ふよりも寧ろ念佛門に關係するところが多いから、今こゝで委しく説明する必要もないであらう。

然らば支婁迦讖の翻譯の中に於て、我が禪宗教學の發達に關係あるものは何であらうかと云ふに先づ『般若道行經』十卷と『首楞嚴經』二卷とが最も主要なもので、『出三藏記集』『開元釋教錄』を始め諸錄等しく載せて支婁迦讖譯として居る。而して此の『道行般若經』は『大正藏經』第八卷に現存し、『首楞嚴經』は梁代既に闕本になつて居るのであるが、しかし後代の異譯本が現存して居るから其の思想内容は充分に知ることが出来る。即ち支婁迦讖は安世高の思想とは大に相違して、大乘思想を始めて支那に傳來せしめた人である。大乘の中に於ても般若思想は特に空理を説いたもので、その當時、支那に於ては老莊の學が非常に熾んであつた爲めに、それを近似せる般若思想は大に支那人の理會するところとなつたものであらう。支婁迦讖の思想は其の先驅をなし、それより已後續々として般若思想の翻譯が出たのである。即ち姚秦の鳩摩羅什三藏の時代に至る翻譯家を擧げるならば

『大品般若』に於ては竺法護の『光讚般若波羅密多經』十卷、無羅叉の『放光般若波羅密多經』二十卷がある。『小品般若』に於ては支婁迦讖の『道行般若波羅密多經』十卷、竺佛朔の『道行經』一卷、支謙の『大明度無極經』六卷、康僧會の『吳品經』五卷、竺法護の『小品經』七卷、衛士度の『摩訶般若波羅密道行經』二卷、祇多蜜の『大智度經』四卷、曇摩婢の『摩訶般若波羅密鈔經』五卷がある。『濡首般若』に於ては嚴佛調の『淨分衛經』二卷があつたので、如何に般若思想の翻譯が旺盛であつたかを知ることが出来る。また『首楞嚴經』に於ては支婁迦讖譯の外に、支謙の『方等首楞嚴經』二卷、白延の『首楞嚴經』二卷、竺法護の『勇伏定經』二卷、竺叔蘭の『首楞嚴經』二卷等の翻譯があつたが、今は何れも散佚して、後代に翻譯せられた鳩羅什譯のみが『大正藏經』第十五卷に收められて居る。この首楞嚴經は『首楞嚴三昧經』と云ふて、我が禪宗に於て用ゆる『首楞嚴經』十卷とは其の内容を異にして居るのである。或は十卷本を以て支那僞經となし、『首楞嚴三昧經』に依つて製作せられたかの如く云ふ説（註十）もあるが、兎に角十卷本は密教的であつて、今の『首楞嚴三昧經』は般若思想を高唱したものであると思ふ。

此の如く支那佛教の初期に於ては盛んに般若思想の經典が翻譯せられたのである。或は『維摩經』如きも、般若の空の思想を維摩居士と云へる在家の菩薩に依つて力説したものであるが、この經の翻譯も嚴佛調、支謙、竺法護、竺叔蘭、祇多蜜等が鳩羅什已前にあつたので、如何に般若思想が

支那人の間に理會されたかを充分に知ることが出来るであらう。而してまた、この時代に於ける禪經の翻譯も決して衰へたと云ふのではない、支曜の『小道地經』二卷、支謙の『禪祕要經』四卷、康僧會の『坐禪經』、竺法護の『修行道地經』六卷、『般舟三昧經』二卷、祇多蜜の『禪經』四卷があつたやうである。

(七)

已上に於て支那佛教初期の禪宗教學に關係ある經典の翻譯を擧げたのである。次に是等翻譯せられた經典の研究に至つては如何なる状態にあつたかと云ふに、素より翻譯者自身が翻譯と同時に講讀したものであらうが、それが研究の盛んになるに従つて、そこに註譯を作り、經序を添へるやうになつたものであらうと思はれる。而して現今その最も古いものと云はれて居るものは、安世高の翻譯した『安般守意經』に對して康僧會の『註解』と、更に道安の『註釋』とを加へたものであらう。『出三藏記集』第六に載せて居る康僧會の『安般守意經序』、道安の『安般註序』、謝敷の『安般守意經序』に依つて充分に證することが出来る。試みに道安の『安般註序』を見ると、

昔漢氏之末、有安世高者、博聞稽古、特專阿毗曇、學其所出經、禪數最悉、此經其所譯也、茲乃趣道之要徑、何莫由斯道也、魏初康會爲之註義、義或隱而來顯者、安竊不自量、敢因前人爲解其下、庶欲蚊虻以助隨藍、霧潤以增巨壑也。(『大正藏經』第十五卷四三丁)

と云ふて居る。康僧會は康居國の人、吳の赤鳥十年（皇紀九〇七）初めて建業に來りて精舍を建てたと云ふのであるから、安世高を去ること一百一年の後と云はねばならぬ。而して此の康僧會は種々なる經典を翻譯すると共に、また種々なる經典を講讀し註釋し、經序をも添へて居るやうに思ふ。『出三藏記集』第十三に僧傳を載せて居るが、その終りにも「又註安般守意、法鏡、道樹三經、并製經序」と云ひ、同第七には『法鏡經序』を載せて居るのであるから、それに依つても知ることが出来るであらう。

康僧會と殆んど同時代に朱士行とか支謙とか云ふ人が居て、共に般若思想を講じたものである。即ち朱士行は支那沙門の始めであつて、中天竺の曇摩迦羅が始めて來朝し、戒律を洛陽に布いた時その受戒に依つて出家したのが朱士行である。この朱士行は常に洛陽に於て竺佛朗の『道行般若』を講じたと云ふのである。（註十）また支謙は支婁迦讖の弟子の支亮に學び、群籍を博覽して諸經を解釋したと云ふことである。尙ほ『高僧傳』に依つて見ると、支考龍は「常披味小品、以爲心要。」と云ひ、或は「時竺叔蘭初譯放光經、龍既素樂無相、即得披閱旬有餘日、使就開講。」と云ふて居る。また康僧淵は「誦放光道行二般若、即大小品也。」と云ひ、或は「以常持心梵經空理幽遠故、偏加講說」と云ふて居る。また竺潛は「遊宮闕、即於御筵、開講大品」と云ひ、竺法蘊は「悟解入玄、尤善放光般若」と云ひ、支遁は「遊心禪苑、木喰澗飲、浪志無生、乃註安般四禪諸經。」と云ひ、

その他『高僧傳』に依つて數へ來らば非常に多いのであるが、要するにこの時代は専ら般若思想を講説したもので、その始まりは康僧會、朱士行の時代からであらうと思ふ。それは康僧會の『安般守意經序』に依つて證することが出来る。

余生未蹤始能負薪、考妣殂落、三師凋喪、仰瞻雲目悲無質受、瞻言願之潛然出涕、宿祚未沒會見南陽韓林穎川皮業會稽陳慧、此三賢者信道篤密、執德弘正、烝々進々、志道不倦云々(『大正藏經』第十五卷一六三丁)

即ち康僧會は漸くにして三人の師に會ふたと云ふのであるが、しかし尙ほ未だ充分に明かならずとして『註解』を作つたと云ふのである。故に康僧會までは大約一百年間、唯だ禪經等を翻譯したと云ふのみで、未だ一般的に行はれて居なかつたものであらう。而して康僧會、朱士行、支謙の時代から漸次に講經が盛んになり、終に道安、鳩摩羅什の時代に至つて其の最後の發達をなし、こゝに禪觀を修する方面が高唱され隆盛になつたものではなからうか。

(八)

道安は支那佛教史上忘れてならぬ人である。佛圖澄に遇ふて其の講を聽き、支曇の『陰持入經』を講ずるをも聽いて業を受け、後ちに太行恒山に於て寺塔を創立し、それより徒衆の集まるもの數百その講經や實に盛んなものであつたに相違なし。

安窮覽經典、鈎深致遠、其所詮般若道行密迹安般諸經、並尋文比句爲起盡之義、乃析疑甄解、凡二十二卷、序致淵富妙盡深旨、條貫既叙文理會通、經義克明自安始也。〔大正藏經〕第五十卷三五二丁

道安は常に佛教註釋者の祖であると云はれて居るが、勿論それ以前にも康僧會の『安般註解』等があつたことはあつたが、しかし未だ幼稚なもので、翻譯それ自らが生硬で、全體の深義を領得することが困難であつた爲めに、之れを講ずるものも皆その大意を叙して、あとは轉讀すると云ふに過ぎなかつたのである。然るに道安に至つては良く一經の全體に通じ、禪經に於ても、また般若の經典に於ても、共に造詣深く、良く講じ良く註し良く序したものと云ふことが出来る。

道安の著述としては『出三藏記集』第五に『新集安公註經及雜經志錄』を載せて居るが、その註書としては十九部二十卷を列ねて居るやうに思ふ。それが殆んど般若思想の經典と安世高所譯の禪經とに局られて居るやうで、先づ般若思想の註と云へば『光讚拆中解』一卷、『光讚抄解』一卷、『般若拆疑准』二卷、『般若拆疑略』二卷、『般若起盡解』一卷、『道行集異註』一卷等であり、安世高所譯の禪經に對する註と云へば『小十二門註』一卷、『大十二門註』二卷、『了本生死註』一卷、『安般守意解』一卷、『陰持入註』二卷等が主なるものであらう。また經序としては『出三藏記集』第六に、『安般註序』『陰持入經序』『人本欲生經序』『了本生死經序』『十二門經序』『大十二門經序』等があり、同第七に『道行經序』同第八に『摩訶鉢羅若波羅密經抄序』、同第九に『增一阿含經序』、同第十に『道地經序』『十

方句義經序』『阿毗曇序』『十四卷鞞婆沙序』等があり、その他「未詳作者」と云へるもの、中にも道安の製作になつたものがあるやうに思はれる。かくの如く有らゆるものに良く註し良く序せられたもので、道安の如何に博學であつたかを知るに充分である。

道安の時代は非常に亂世であつて、老莊の教が一般の人心を風靡して居た時であるから、所謂無爲無欲恬淡の生活を貴しとしたものであらう。道安も素と英儒の家に生れ、道教を學んで居たこともあつたので、彼れが超俗脫塵、恬淡無爲の風格を備へ、好んで般若思想を説き、安坐瞑目、沈思禪觀を修せられたものと思ふ。『高僧傳』に於ても「安公以爲、若及面稟、不異見聖。」(『大正藏經』第五十卷三二四丁)と云ふてあるから、如何に道安が安世高を思慕し、その禪經に註したかを知ることが出来る。而して彼れの思想を最も良く云ひ顯はしたものは、彼れの『安般註序』に、

道之所寄無往不因、德之所寓無往不託、是故安般寄息以成守、四禪寓骸以成定也、寄息故有六階之差、寓骸故有四級之別、階差者、損之又損之、以至於無爲、級別者、忘之而忘之、以至於無欲也、無爲故無形而不因、無欲故無事而不適、無形而不因、故能開物、無事而不適、故能成務、成務者、卽萬有而自彼、開物者、使天下兼忘我、彼我雙廢者、守于唯守也。(『大正

藏經』第五十五卷四二二丁)

と云ふてあるのが最も明瞭であらうと思ふ。兎に角、道安は般若思想の經典と禪經とに全力を注が

れたものである。勿論その他にも僧伽提婆、曇摩難提、僧伽跋澄等の譯經に盡力せられて、小乗教の宣布にも功があつたので、自ら序文も添へられて居るが、しかし時代は全く禪數の學究が盛んであつたものと思ふ。即ち僧伽跋澄の傳にも、「苻堅之末、來入關中、先是大乘之典末廣、禪數之學甚盛」(『大正藏經』第五十五卷九九丁)とあるので、この時代は禪數の學は如何に盛んであつたかを知ることが出来る。

道安の出生の年代は不明であるけれども、(註十二)その入寂は晋の太元十年(皇紀一〇四五)なること『高僧傳』に明記するところである。故に禪經の講讀時代は康僧會より大約一百五十年間であつて、道安の門から出て出藍の譽れある慧遠の時代は最早や第三期の禪教實修時代に入つたものと云はなければならぬ。

註一、『開元釋教』錄第十、『貞元新定釋教目錄』第十八に『叙列古今諸家目錄』を載す。參照せよ。

註二、深浦正文氏著『佛教聖典概論』第九章第三節參照。

註三、『出三藏記』集には『大安般守意經』を一卷と云ひ、『開元釋教錄』には二卷となす。また『出三藏記集』には『大道地經』を二卷と云ひ、『開元釋教錄』には『道地經』一卷となす。また『出三藏記集』には『陰持入經』一卷と云ひ、『開元釋教錄』には二卷となす。共に同本なり。

註四、『增一阿含經』第一『十念品』を參照せよ。

註五、『大安般若意經』の『序文』に云く、「是以行寂、繫意著息數一至十、十數不誤意定在之、小定三日、大定七日、寂無他念、怕然若死、謂之一禪云々」(『大正藏經』第十五卷一六三丁) 參照せよ。

註六、『僧伽羅刹經』は罽賓の沙門たる僧伽跋澄が、苻秦の建元二十年(皇紀一〇四四)に、長安に譯出せるものである。その序文は『出三藏記集』第十に載せてあるが「未詳作者」と云ふてある。けれども本文より考へて「道安作」なることは明瞭で、尙ほ『出三藏記集』第十の『僧伽羅刹集經後記』等參照すべし。

註七、常盤博士の『國譯一切經』本緣部第九二六四丁に委しく僧伽羅刹の思想を説く。

註八、佐藤泰舜氏の『國譯一切經』經集部第四七丁參照せよ。

註九、五停心觀の中、多貪に對する不淨觀、多瞋に對する慈悲觀、多散に對する數息觀は、諸經論みな一致するも、著我と愚癡に對する觀法は異説ありて一定せず。『校本四教儀集註』卷三三丁

註十、望月博士の説『佛書研究』第三十四號、第三十五號參照。

註十一、『出三藏記集』第十三朱士行傳に云く、「士行常於洛陽講小品、往往不通、每歎此經大乘之要、而譯理不盡、誓志捐身遠迎大品云云」(『大正藏經』第五十五卷七九丁)

註十二、道安の入寂は『出三藏記集』に「建元二十一年二月八日」と云ひ、『高僧傳』には「太元十年二月八日」と云ふ。これ前者は秦の年號、後者は晋の年號にて云ふ。共に同年と知るべし。而して『高僧傳』の宋、元、明等の「大藏經」には入寂の歳を記さず、不明なれど、『大正藏經』には「年七十二」と云ふ。これより推算すれば、出生の年代は、晋の建興二年（皇紀九七四）に當るか。

禪宗の教學發達に就て(一)

(二六)